



Title	<紹介>金水敏編著『よくわかる日本語学』
Author(s)	岸本, 恵実
Citation	語文. 2024, 123, p. 47-48
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100247
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

金水敏編著『よくわかる日本語学』

岸本恵実

本書は「やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ」の一冊として刊行された。三十名の執筆者には、本学会会員および本学関係者が多く含まれ、紹介者もその一人ではあるが、一読者として本書をできるだけ客観的に紹介する。

本書の特徴の一つは構成にある。「はじめに」に続く各章は以下の通りである。「第1章 日本語の定義」「第2章 音声・音韻と表記」「第3章 形態論」「第4章 語彙論」「第5章 統語論・文の意味論」「第6章 文章・文体・表現論」「第7章 言語行動・社会言語学・応用日本語学」「第8章 日本語の歴史」である。第1章にてまず、日本語の地域差と世界に広がる多様な話者・用法・近隣言語（中国語、朝鮮語、モンゴル語、アイヌ語、オーストロネシア諸語など）を示すことで、日本語とそれに関する学問領域の持つ広がりを、第2章以下を読み進める前に俯瞰することができる。もう一つの特徴は、統語論、広い意味での位相、日本語史の内容の充実であろう（ほかの項目が充実していないわけではなく、他書との比較による）。統語論の小項目には、統語論概説、語順とかき混ぜ・省略、主節と従属節、条件節、連体修飾節・準体節、格と格助詞、主題・焦点、動詞文、形容詞・形容動詞文、名詞述語文、取り立て、受身文、自発・可能、使役文、アスペクト、テン

ス、ムード・モダリティ、終助詞と文末インントネーション、疑問文の十九項が立てられている（個人的には、編著者である金水敏氏が本書企画以前より、統語論の重要性を説いていらっしゃったことが思い起こされる）。また、位相は「社会的集団や階層、あるいは表現上の様式や場面それぞれにみられる、言語の特有の様相」（一一二頁）という日本語学独特の意味で使われる用語であるが、この語を使いながら二〇一〇年代以降開拓されてきた「役割語とキヤラクター」「ヴァーチャル方言」などが立項されている。第8章の「日本語の歴史」は、それまでの章の内容、たとえば統語構造や位相が、長い縦軸（通時）の層を持つて変化してきたことを示し、それまでの横軸（共時）を中心とする内容から、本書を立体的に見せる構造になつていて。このことは、本書が「日本語の定義」の「標準語・共通語」に始まり、「日本語の歴史」の「標準語の誕生」で終わることにも表れている。

各項目は、「〈わかる〉シリーズ」に共通する実例と図版の豊富さに加え、国内外の理論や近年の研究が紹介されており、初学者にとっては日本語学が「よくわかる」というより、「もつと知りたくなる」教科書だと思われる。数例だが具体的にあげると、日本語と他言語との接触から生まれた混合言語（クレオール）について（「日本語の方言・日本系言語」、十一頁）、現代共通語の話し言葉と書き言葉とで、述語と項の定まり方が大きく異なること（「格と格助詞」、七四～七七頁）、教育の場において、現代、複数種類の五十音図が見されることを手がかりに、日本語についての気づ

きを促す例（「国語教育」、一三八〇—一三九頁）などが、日本語史を専門とする紹介者には興味深かつた。日本語学の教科書は数多く出版されているが、最新の研究動向を知るためにもぜひ手にとってご覧いただきたい。

（ミネルヴァ書房、一九三四年七月、一九三頁、二、五〇〇円+税）

（きしもと・えみ 本学教授）